

日常災害に対する生活者の意識と事故防止の考え方

○平田京子 石川孝重（日本女大）

目 的 生活者の日常災害に対する意識を分析し、日常災害に対する生活者の危険認識の度合いや設計上の要望について解明することを目的としたアンケート調査から結果を報告する。特に、生活者のもつ各事故に対するイメージや、設計・危険性の認知に対する考え方を分析し、生活者が日常災害の経験を通じて住宅の設計者に求めることは何か、また危険の認知度は生活者の世代によりどのような特徴があるのかを考察した。

方 法 文献調査や事故の現状を参考にして、生活者に対する下記の調査を実施した。

実施期間：1999年8月～9月

調査対象：三重・愛知・富山・石川・長野・鳥取・千葉・東京在住の14歳以上の男女 218人

結 果 生活者は一般に日常災害を起こりにくいものとして捉えている。また事故に対してというよりは部屋ごとに起こりうる危険を意識している。60歳未満では台所に最も危険を感じているのに対し、60歳以上では階段が最も危険な場所と感じている。60歳以上の世代は他世代に比べ、事故が起こりにくいと認識している割に気をつけている度合いが高く、逆に23歳未満の若い世代では気をつけていないという傾向にある。したがって年齢が上がるにつれ、事故の頻度に関わらず、気をつける度合いが高くなる傾向にある。

また現状では、生活者は事故が起こっても自分に原因があると考える傾向にあるが、今後、生活者の意識が変わり、事故の責任を明確にするようになってくれば、設計に問題があるとされる可能性も生じる。そのようなにならないためにも、設計者は、生活者が日常災害に対してもっている意識を認識し、それを設計に活かしていくことが大切であると考えます。